

第十章 砂漠と海と空に消えた「ダビデの星」

第一節 ペルシャ湾上空にて

3機のイスラエル戦闘機はペルシャ湾上空をあてどなく飛行し続けていた。残された燃料はわずかである。左岸はイラン、右岸はサウジアラビア、カタール、UAEと続くアラブの国々である。いずれもイスラエルと敵対する国々であり、陸に近寄り過ぎると領空侵犯になり、スクランブル(緊急発進)に遭遇するか、さもなくすれば地対空ミサイルで迎撃される恐れがある。救難信号「メーデー」を発信してカタールの米空軍基地に助けを求める手が無い訳ではないが、そうなると米国は厄介な外交問題を背負いこむことになる。今回のイラン空爆はイスラエルの単独軍事行動である。米国は事前に空爆計画を知らされ、それを黙認したのは事実だが、それはあくまでも暗黙の了解ということであって、積極的な支援はしない約束であった。従って飛行中のイスラエル機が独断で救援を求めることは許されない。

イラン或いはアラブ湾岸諸国の領空外のペルシャ湾の空域―その狭くて細長い回廊だけが今やイスラエル機に残された唯一自由で安全な場所であった。それはホルムズ海峡で一本の線に細り、海峡を抜けるとアラビア海、インド洋という果てしなく自由な空が開ける。そうなれば海面に不時着する寸前に緊急脱出し、洋上を漂流しながら救助を待つことができる。しかし差し迫った状況はそれを許さない。何しろホルムズ海峡まで達する燃料すらないのだから。

その時である。彼らのヘッドフォンに滑らかな英語が飛び込んできた。

「こちら貴機救援のためカタル・ウデイド基地を発進した米軍機である。現在貴機の後方にあり。貴方三機を安全に目的地まで誘導する。聞こえたら応答せよ。」

『エリート』が直ちに米軍機に応えた。エリートの声には安堵の色が滲んだ。無線を傍受した『マフィア』は、これで再び祖国の英雄として帰還できる道が開けた、と満面に笑みを浮かべた。

しかし『アブダラー』だけは違っていた。彼は安堵した訳でもなく、まして大喜びした訳ではなかった。むしろ彼の顔に一瞬陰りが生じ、次いで体の中から恐怖心が沸き上がった。

△本当に救助してくれるのだろうか？▽

彼の体のどこかで△これは巧妙な罠だ▽という声が聞こえた。

彼の頭脳は米軍の救援を信じようとする。しかし肉体のあらゆる部分がそれとは異なる声を発している。これまで全ての肉体の動きを制御していたはずの頭脳―理性をふりかざして有無を言わせず肉体に命令してきた頭脳―に対して今や肉体の各パーツが一斉に反乱を始めたのである。

△反乱者は何者なんだ？▽

頭脳と肉体の分裂を回避しようとして、アブダラーは必死になって疑問を繰り返した。しかし頭の中は混乱し、次第に意識がぼやけ始める。誰ともわからぬ反乱者が彼の頭脳を支配しつつあった。

第二節 バーチャル管制…砂漠に消えた二番機

「我々は貴機を一機ずつエスコートしてそれぞれの着陸地に向かう。各機の着陸地点が近づいたら地上の管制官が誘導する。我々の任務はそこまでだ。」

「なおこの電波を傍受した最寄りの国が貴機をイスラエル機と認識した場合、何らかの妨害行為或いは敵対行為を取る恐れがある。従って今後一切貴方からの通信は控え、黙って当方の指示に従ってもらいたい。」

米軍パイロットは同じ言葉を二度繰り返した。その声には有無を言わせぬ力がこもっていた。

「まず右翼後方の二番機。直ちにアラビア半島方向へ向かえ。」

第10章 『マフィア』は言われるままゆつくり右に旋回し仲間の2機から離脱した。後方から米軍機が追いつき、並走を始めた。お互いに相手のパイロットの顔が識別できるほどの近さである。マフィアは米軍機のパイロットに向かつて親指を突き上げて見せた。交信を禁じられたマフィアとしては、それは救援に感謝する意思表示であった。しか

し相手のパイロットはそれに応えず操縦桿を握りしめ、少し下降してマファイア機の下に潜り込むと、何かを確認するようにマファイア機の胴体腹部を見上げた。

パイロットはそこに何もなことを確認すると、今度はマファイア機の前に躍り出て機首を真っ直ぐアラビア半島に向け、すこしずつ高度を下げ始めた。米軍機のジェットエンジンから時折り噴き出るバーナーの炎が、俺について来いVと言うメッセージであった。

2機の戦闘機は今やペルシャ湾からアラビア半島に入りつつあった。眼下に停泊するコンテナ船が見え、次いでクリーク（入江）の奥の岸壁で荷役するクレーンが目に入った。その先の内陸部には高層ビルが林立する近代的な都市が広がっている。その中でひととき目を引く超高層ビル。世界最高層のビル「ブルジュ・ハリーフア」である。周囲を圧倒してそびえたつ高さ800メートルを超えるビルは、高度を下げたマファイア機からはまるで手を伸ばせば届かんばかりの近さであった。

第10章
快晴にもかかわらず「ブルジュ・ハリーフア」は先端部分が少し霞んで見えた。大都会ではスモッグのため地上が霞むことは珍しくないが、超高層ビルの上半分がかすんでいる。『マファイア』は魔法の絨毯に乗って千夜一夜の不思議な世界を覗いたような気持ちで眺めていた。その大都会のすぐ先はもう砂漠である。人々はその砂漠を「ブル・アルハリ」と呼ぶ。アラビア語で「空白の四分の一」を意味する広大な砂漠であ

第10章

る。アラビア半島の四分の一を占め、ごく最近まで満足な地図すら無かった空白地帯ということから名付けられたのである。

戦闘機が向かうその砂漠は今、地上と空が一体となった赤茶けた幕に覆われ地平線が見えない。そしてその幕が海岸線にひしひしと近づきつつあった。この時期特有の「砂嵐」の襲来である。超高層ビルがかすんで見えたのはその前兆だったのだ。二機の戦闘機はその砂嵐に突っ込もうとしている。こんな砂漠のど真ん中にジェット機が着陸できるような滑走路があるのだろうか？『マフィア』は恐怖と不安に駆られて先導の米軍機に行き先を確かめたい衝動に駆られた。しかしこちらからの交信は禁じられており、先導する米軍機はまるで何事もないかのように高度を下げつつ砂嵐の中へと突き進んでいった。『マフィア』は観念し黙って追走した。

砂嵐の中に突入すると猛烈な逆風のため機体は木の葉のように揺れ、真昼間と言うのに夕暮れ時のように暗くなり時々先導の米軍機を見失うほどであった。高度計が地上まで数百メートルを示したその時、先導機から呼びかけがあった。

「この先に誰も知らない米軍の滑走路があり、貴機はそこに緊急着陸してもらおう。ここから先は基地の地上管制官が誘導するので周波数を〇〇ヘルツに切り替えよ。当機は所属基地に戻る。グッド・ラック。」

言い終えた米軍機は機首を左斜め上方に向けて『マフィア』の視界から飛び去って

第10章

いった。入れ替わりに今度は管制官の声が飛び込んできた。

「こちら管制塔。こちら管制塔。貴機がこちらに向かっているのをレーダーで確認した。着陸準備体制に入りそのまま直進せよ。」

砂嵐で視界は殆どゼロのため管制官の誘導だけが頼りである。『マフィア』は微塵も疑わず管制官の指示に従ってずんずんと高度を下げた。

殆ど地上すれすれになった時わずかに視界が開けた。しかし『マフィア』の目の前に立ちはだかったのは大きくうねる砂丘の壁であった。

△進入高度が低すぎたのか？▽

彼は反射的に操縦桿を引き機首を立て直そうと、車輪が滑走路に触れると同時に再び離陸する「タッチ・アンド・ゴー」を試みた。これまで訓練で何度となく経験してきたことである。

しかし堅いコンクリートで固められた滑走路と砂漠の柔らかい砂とでは状況が全く違う。『マフィア』の意識があつたのはそこまでであった。戦闘機は砂丘をこすると砂にめり込み、主翼と胴体そして尾翼は一瞬にしてバラバラに飛び散った。胴体部分にはパイロットを収容したまま砂漠の中に転がった。

砂嵐は相変わらず激しく吹き荒れ、砂が風防ガラスを叩きつけ周りに少しずつ積り始めた。胴体に描かれた「ダビデの星」が次第に砂に埋もれ、コックピットの中のパイロットもいつしか砂の中に消えて行った。

数時間後、砂嵐が止んだ時、砂漠は何事もなかったかのような表情を取り戻した。ジェット機の墜落したあたりは渺渺とした砂丘が連なり、もはやだれも墜落場所を特定することができない。これが何万年も前から繰り返されてきたルブ・アルハリの自然というものだ。砂丘の下には砂漠に迷い込んだまま生きて帰ることのなかったラクダや羊、さらにはベドウインの骨があちらこちらに埋まっているはずだ。イスラエル機とそのパイロットも誰にも発見されることなく砂漠の中に眠り続けるのである。か。「ルブ・アルハリ」は大昔から「空白の四分の一」なのだ。

ウデイド空軍基地の薄暗い作戦室のレーダー画面から一つの点が消えた。ベテラン管制官の最初の仕事は終わった。彼は次に備え無線を新しい周波数に切り替え、もう一度レーダーを見つめ直した。そして数分以内に現れると聞かされていた新しい点が画面の隅から現れるのを待った。しかしそれはいつまで経っても現れなかった。

第10章
その時、上官が部屋に飛び込んでくるなり大声で「作戦は中止だ」と叫んだ。回転椅子を回して振り返った管制官に上官の引きつった顔が覆いかぶさるように飛び込んできた。理由を聞いても上官は黙ったままである。管制官は訳も解らず無線のスイ

ツチを切り、立ち上がると室外へ向かった。

部屋の扉を開けながら彼は独り言をつぶやいていた。

「ありもしない滑走路の管制塔で戦闘機の着陸を誘導するなんて仕事は初めてだ。バーチャルな管制は見習い士官の時にシミュレーターを使って訓練させられて以来だな。」

「やはり仕事は滑走路の横の高い管制塔でやるのが一番だ。あそこで周りの広い景色をながめながら戦闘機の離着陸をコントロールしていると、小さいながらも世界を支配しているような気分になれるからな……」

何となく物足りず納得できない気分を抱きながら廊下に出た彼の耳に若い兵士の会話が飛び込んできた。

「さっき西の空でとてつもない閃光が走ったぜ。あれは何なんだ。」

「俺も見たさ。まるで太陽がもう一つ生まれたみたいだったな。」

管制官は廊下の窓から空を眺めたが、そこにはいつも通り雲一つない抜けるような青空とギラギラと光り輝く太陽が一つあるだけだった。

第三節 回転する六角星…海に墜ちた一番機

『マファイア』に続いて『アブダラー』も編隊を離脱した後、一番機の『エリート』はペルシャ湾上空をホルムズ海峡に向かって真っ直ぐ飛行を続けていた。彼の横には米軍戦闘機がびったりと並走しており、コックピットのパイロットの姿をはっきり見ることが出来る。パイロットは時々こちらを見ては親指と人差し指を丸め、そちらはどうか？Vと聞いてくる。『エリート』も同じ身振りでOK！Vと無言のサインを送る。

彼らはどこへ連れて行かれたのだろうか？V

『エリート』は並走する米軍機に僚友2機の行く先を尋ねたい衝動に駆られた。親分肌の彼は仲間の安否が何よりも気がかりだ。しかし無線の会話は禁じられている。そして自らの命運も米軍パイロットに委ねられていることに思いが至った。今はただ仲間二人と一緒に祖国に凱旋することを信じて状況に身を委ねる他なかった。

パイロットが再びこちらを向いて指でサインを送ってきた。今度は親指を下に突き出し、こぶしを上下に振った。下降せよVとの合図らしい。米機は少し速度を上げて前に出ると高度を下げ始めた。

第10章

『エリート』もそれに合わせて前のめりの下降姿勢に入った。それまで正面に見えていた水平線がコックピットの斜め上方に持ち上がり、視界が一面コバルトブルーの

第10章

ペルシャ湾の海に覆われた。波も無く穏やかすぎる海面。二つの巨大な球形タンクを抱えたタンカーが音も無く海面を滑って行く。天然ガスを液体のまま運搬するLNGタンカー船だ。

カタールのLNG基地に向かっていているのだとすれば、既にペルシャ湾の中ほどを過ぎたようだ。燃料計はほとんどゼロを示している。残された時間は少ない。

その時、視界の先にタンカーの数倍もある巨大な物体が現れた。銀色に輝く鋼鉄の塊は何者も寄せ付けず、辺りの全ての物を威圧する圧倒的な存在感を示している。船を斜めに横切る甲板には白と黄色の直線が走り、その甲板を見下ろす艦橋がピラミッドのようにそそり立っている。米国が誇る海の大要塞、原子力空母「ハリー・S・トルーマン」。それはイスラエル空軍のパイロットが初めて見る威容であった。

「貴機の救援体制は整っている。そのまま高度を下げ着水前に緊急脱出せよ。空母から直ちに救命ボートが出動する。」

米軍パイロットはそう告げると機首を反転させ、先程のLNGタンカーが向かいつつあった方向に飛び去った。

空母『ハリー・S・トルーマン』の飛行甲板上で整備士の二等水兵がこちらに向か

つてくる一機の戦闘機を見上げていた。F15の格納作業を終え艦内に戻ろうとした矢先、艦橋からけたたましいサイレンが鳴りわたり、同時に数名の水兵を乗せた救命ボートが海面に降りて行くのが見えた。

△所属機の着艦予定は無かったはずだが……。ひよつとして近くの陸上基地から飛び立った戦闘機が事故か何かで緊急着陸許可を求めているのだろうか。だとしても着艦装置を持たない戦闘機が航空母艦に無事着陸できる訳ではないし、着艦経験のないパイロットには土台無理な話だよな。▽

空を見上げているのは整備士の二等水兵だけではなかった。どこで聞きつけたのか非番の兵士たちがあらゆる物陰から固唾をのんで北の空を仰いでいる。娯楽の乏しい航空母艦の生活でこれほどスリリングな事件に立ち会えるなど滅多にないことだ。

その戦闘機はまるでスローモーション映画を見るように真っ直ぐこちらに向かってきた。艦の手前数百メートルのところまで風防ガラスが跳ね上がりパイロットが勢いよく放り出された。パラシュートが開きパイロットがゆつくりと海面に着水するのが見えた。救命艇が甲高いエンジン音を響かせながら着水地点に向かった。

第10章

パイロットを放り出した無人の戦闘機はそのまま海面に向かって墜ちていく。機体の横の日頃見慣れない六角星のマークが目に入る。水兵たちは一様にどよめいた。

イスラエル機は海面に機体をぶつけると水しぶきを高くあげて一度跳ね上がった。次に機体はつんのめるように機首を真下に垂直になると、最後に180度仰向けに引っくり返り海面に叩きつけられた。

その間、横つ腹の六角星もゆつくりと180度回転した。米兵たちは最初その星が余りにもスムーズに転がるように見えたことに違和感を覚えたが、彼らはすぐにその理由に気がついた。彼らが日頃見慣れた五角形の星は回転がぎこちない。それに比べ六角形の星は滑らかに転がる。

彼らは同時に六角形よりも五角形の方が安定していることにも気がついた。五角形は両手両足を広げた人間の姿である。二本足で立ち、両腕を真つ直ぐ横に伸ばし、頭がしっかりと正面を向いている五角形の星。どつしりと構えた五角形の星は自信を示している。それに比べ上下左右ともに対称である六角形の星は一見安定的に見えるが、目の前の星は流れるように転がって行く。『ダビデの星』は滑るよう一回転し、やがて水面下に消えていった。

第10章 『ダビデの星』は海中でもしばらくはゆつくりと回転していたが、やがて胴体は回転を緩め今度は木の葉のようにゆらゆらと揺れながら沈んでいった。海面からの光は弱まり、星の形も次第に見分けられなくなる。機体はペルシャ湾の漆黒の闇に吸い込

まれて行った。

艦橋からイスラエル軍パイロットの救助を双眼鏡で確認した艦長は直ちにペンタゴンに状況を報告した。

報告を受けた国防長官は

「これで『シャイ・ロック』の親父に貸しができた」と独り言をつぶやいた。

第四節 大空に散華した三番機

三機編隊の後方に米軍の戦闘機が近づきつつあった時、『アブダラー』は最初のうちは他の二人のパイロットと同様米軍の救援により「地上」に舞い戻れるという安心感に包まれた。

しかし、その後で彼だけは他の二人とは異なり安心感と不安感が交錯する奇妙な感覚を覚え始めた。その感覚は『マファイア』が隊列を離れ伴走の米軍機と共にアラビア半島方面に消えて行き、次は自分の番だと告げられた時、少し鋭さを増した。

第10章

米軍機のパイロットが『マファイア』の時と同じように『アブダラー』機の下に回り込み、装備を確かめた。パイロットは左翼と胴体部分にそれぞれ1発ずつのミサイル

が装着されたままであることを目視するとそのことを直ちに基地に報告した。基地に緊張が走った。

「右上方を見よ！」

『アブダラー』の耳に米機のパイロットの聲が飛び込んできた。

「これから給油機により貴機に空中給油を行う。」

米戦闘機の後に従いつつ揺れ動く心に気を取られていた『アブダラー』は我に返り窓外を見た。黒い巨体が頭上に迫っていた。

先導役の米戦闘機が並走態勢に戻り、給油機が覆いかぶさるように彼の戦闘機の上にせり出し、腹部から給油パイプを空中に伸ばし始めた。

「本給油機は我が国がイスラエル空軍に売却したものと同じ型式だ。従って通常の訓練の要領で給油を受けよ。」

第10章

今度は給油機のパイロットの声であった。頭上の給油機のマークが目に入った。パイロットになりたての時、米国アリゾナ州の空軍基地で受けた飛行訓練を思い出した。あの時と全く同じ光景だ。否、一つだけ違うことがあった。それはあの時『アブダラ

第 10 章

「―』が操縦したのは五角形の星の米軍訓練機であったが、今彼が操縦している戦闘機には六角形の星がついている。」

入れ替わりに再び米軍戦闘機のパイロットが語りかけてきた。

「給油が終わる頃にはホルムズ海峡を越えているはずだ。そこでデイエゴ・ガルシア島の基地を発進した別の米軍機に護衛業務を引き継ぐ。彼が貴機をデイエゴ・ガルシアまで送り届ける予定である。」

インド洋に浮かぶデイエゴ・ガルシア島は同海域最大の米軍基地である。イギリス領であるが、島全体が米国に貸与されている。いずれの国からも干渉を受けない米軍の聖地。そこで『アブダラー』と彼が操縦するF・15にはどのような運命が待ちかかっているのだろうか。祖国への安全な帰還か、それとも……………。

彼の頭にかすかな疑問が生まれた。

△それにしてもイランの原発施設を空爆したあと、自軍の給油機が来ないというトラブルの情報を受けてからまだ1時間程度しか経っていない。それなのに米軍の給油機が目の前に現れるなんて一寸話がうまく出来過ぎている感じもするのだが……………。▽

△彼らの目的は我々を救うことだったのだろうか？▽

△これから新たな使命が始まるのだ▽と囁く内なる声が聞こえる。

幻覚なのであろうか。彼の肉体が今や何者とも知れぬ別の生命体に乗っ取られたように感じた。もはや自分で自分が制御できない状況に陥りつつあった。

『アブダラー』は残り少ない燃料をエンジンに吹き込むと操縦桿を引き給油機の下をすり抜けて一気に急上昇を開始した。

思いもかけない行動に米軍の戦闘機も給油機も一瞬虚を突かれたが、気を取り直した戦闘機が追走体制に入った。

『アブダラー』機はぐんぐん上昇しつつあった。まるで地球の重力圏を突破しようとするかのように……………。

もちろん戦闘機のスピードで重力圏を脱出することなど不可能である。しかも重力圏を脱出したその先の真空と暗黒の宇宙に何が待ち受けていると云うのであろうか。

第10章

高度計が3万メートルを超えた辺りで上昇スピードは急激に鈍りだした。揚力が無くなり、燃料も底をついたようである。米軍機はすでにそのかなり手前の高度にとど

第10章

まり『アブダラー』機の行動を監視する態勢に入っていた。超高度による機体の損傷とパイロット自身の生命の危険を恐れたからである。

つい先ほどまでマッハ以上を示していた速度計の針がゼロ表示に向かって逆回転し始めた。速度ゼロになれば地球の引力に引き戻され、いずれどこかに墜落する。墜落地点はペルシャ湾か？アラビア半島か？それともイラン領内か？

『アブダラー』は何を思ったのか、突然ミサイル発射装置の液晶画面に指を触れ、左翼に残されたバンカーバスターに攻撃目標を入力した。次に彼は迷わず発射ボタンを押した。バンカーバスターは赤い炎を吐きさらなる上空をめざして飛び出していった。

数秒後、ミサイルは180度反転して地球に戻り始めた。それは最早誰にも止められない意思を持ち、パイロットが入力した目標に真一文字に向かっていった。

『アブダラー』はバンカーバスターが自分の戦闘機に向かってくるのを待ちかまえた。満天の星の中でバンカーバスターの炎が輝き、それはみるみる大きく迫ってきた。

二つの物体が衝突する寸前、『アブダラー』は緊急脱出装置のボタンを押した。それが彼の最後の仕事であった。

第10章

気密のコックピットから真空中に放り出された彼の肉体は一気に膨れ上がった。ヘルメット、飛行服、手袋そして靴が膨張する肉体を押しえつけたため、その力は唯一外気に晒された彼の頸部に集中した。彼の首まわりはスポーツ選手のように頭部と同じほどのサイズに膨れ上がった。首にかけていたネックレスの鎖が千切れて姉と姪の写真を入れたロケットは重力の殆ど無い超低温の暗黒の中に弾き飛ばされた。

その時、バンカーバスターは設定された攻撃目標を正確に捉え、目標物体がバラバラに飛び散った。『ダビデの星』が描かれた胴体部分は空中に舞い、次いで重力に引かれて落下を始めようとした。

しかし『ダビデの星』が落下運動に移ることはなかった。次の瞬間、強烈な閃光と爆風、そして全てを焼き尽くす高熱が辺りを支配した。バンカーバスターの激突で小型核ミサイルが誘爆したのである。

超高熱のため『アブダラー』の肉体は瞬時に蒸発した。風防ガラス、プラスチック計器盤、そして胴体や翼部などの金属板も落下を始める前に溶けてなくなつた。重い金属の塊であるジェットエンジンだけは表面が溶けたものの内部を残し地表へ落下していった。

『アブダラー』の首からはずれ宙に漂うロケット。小さくて丸い円盤状のロケット

は爆発の衝撃で新たな動きを始めた。超高温の気流がロケットに迫ったが、爆風に吹き飛ばされたおかげで内部が高熱に晒されることはなかった。核爆発のエネルギーが重力圏を脱出するに十分なスピードをロケットに与えた。こうしてロケットは地球を背に宇宙へと飛び立った。

重力圏を脱して宇宙に飛び出したロケット。その軌道は正確にある方向を目指していた。そしてロケットの内部には真空と超低温の宇宙空間で冬眠状態に入った或る生命体がひそんでいた。その生命体は長く果てしない故郷への旅路にいたばかりであった。

(第一部完)